

審議会等議事概要

平成29年度 滝川市休日夜間初期救急医療維持・確保対策検討会議 議事概要

日 時	平成30年1月31日（水曜日）午後6時30分～午後7時15分
開催場所	滝川市保健センター
出席者	出席：男澤委員長、永井副委員長、文屋委員、中垣委員、椿委員、中井委員、 國嶋委員 欠席：藤井委員、平木委員 事務局：森健康づくり課長、白石課長補佐、森主査
議 事	<p>1. 開会 事務局) 滝川市休日夜間初期救急医療維持・確保対策会議は、平成26年10月から休日夜間急病センターを滝川市立病院へ機能移転したことに伴い、休日夜間急病センター運営委員会解散し、平成27年1月に新たに設置した会議である。</p> <p>委員会は今回で3回目の開催となる。市立病院医師の転出入が不透明であったため時期を遅らせ1月開催とした。</p> <p>委員は、各機関、団体から選出された委員より構成されている。職務期間は2年間となっている。現委員の職務期間は、平成29年1月1日から平成30年12月31日の2年間である。</p> <p>市立病院選出の委員が昨年4月の人事異動により田湯部長から椿部長に替わっている。</p>
	<p>2. 委員長・副委員長選任 事務局) 今回は、委員改選後の初めての委員会となるため、委員長、副委員長を選出する。自薦、他薦があれば願います。</p> <p>自薦、他薦が無ければ、事務局案として引き続き委員長に男澤先生、副委員長に永井先生に願います。</p>
	<p>3. 挨拶 委員長挨拶 委員長) 平成26年に急病センターが閉鎖し、市立病院へ機能移転し3年が経った。夜間休日急病センターの役割として市立病院に対応してもらい、問題なく運営していることに感謝する。これからは救急医療が地域でも色々な形で問題になってくると思うので、この会議を通して滝川市の救急医療を考えていきたいと思う。</p>
	<p>4. 議題 (1) 滝川市休日夜間初期救急医療維持・確保事業の現状について</p>

事務局) 資料に沿って説明する。

・滝川市休日夜間初期救急医療維持・確保事業要領 (3 ページ)

診療医師及び勤務日は、北大の第二内科が第1.第2.第3.第5週を担当している。また、内訳は、第1.3.5週が膠原病グループ、第2週は糖尿病・内分泌グループとなっている。北大第2内科は3グループあり、その中の2グループより医師の派遣を受けている。

急病センター時代から長年にわたり第2週の土曜日を担当している検査輸血部長の清水力先生が、平成29年度をもって北大病院を退職するため当番を辞退したいという連絡があった。後任は、第2週担当の糖尿病グループから派遣を受ける。

医師派遣に関するトラブル等はないが、北大医師の担当週で学会等の行事で医師派遣が困難との連絡があり、事前に市立病院長に代行依頼し、市立病院医師が対応したことがあった。

また、一昨年のクリスマス時期に札幌の大雪で、JRの運休により市立病院への到着が遅れ、帰りのJRも止まっていたという事例があった。今年は滝川周辺が大雪に見舞われているが、派遣医師が来られないという事例は発生していない。

当課は、交通機関等のトラブルで急遽来られない、帰れないということがあった時のためにマニュアルを作成して対応している。

資料参考 (4 ページ)

滝川市休日夜間初期救急医療維持・確保事業実績

平成27年～29年1月まで診療実績をみると特に大きな変化はみられない。月によってバラつきはあるが、一日当たりの患者数も10～30人、多い時で40人ぐらいである。(資料参考)

昨年10月にこどもクリニックが閉院したが、急激な受診数の増加といった影響は出ていない。

事務局) 平成30年度 休日夜間初期救急維持確保事業

市立病院含めそれぞれの担当曜日を載せている(資料参考)

3連休や祝日の土曜日などがある週は、事前に医師へ勤務時間の再確認をしている。また、年末年始の出勤時間や食事についても間違いがないよう対応したい。

委員長) 質問・意見等があればお願いします。

委員) 1月はインフルエンザで患者さんが増えているということか。

委員長) インフルエンザの患者も多いが、年末年始は患者数が多い傾向がある。

(2) 滝川市休日夜間初期救急医療維持・確保事業の課題等について

事務局) 広報たきかわで時間外夜間急病テレホンセンターの電話番号を載せている。昨年の3月まではこの電話番号にかけると、消防署で録音した音声ガイダンスが流れていた。消防を広域化したことと新庁舎移転

に伴い、現在は直接担当者が対応している。東京消防庁の救急受診ガイド（資料参考）があり、迷った時に相談できるという事業があり、札幌でも救急安心センター札幌という事業を行っている。相談センターと勘違いして相談をする市民が増えている話を聞いた。限られた人員で業務を行っていることもあり、119番通報の対応に支障がでる事で、名称の変更が必要である。時間外夜間急病テレホンセンターではなく、当番病院案内ダイヤルに変更することになった。

委員)

それはすでに実施されているのか。

事務局)

消防と広報の掲載関係と市のホームページが3月から変更予定である。また、市立病院の当直も医師の年齢の関係で、当直ができる医師が減っている。院長に確認した所、次年度も今まで通り担当すると返答をもらっている。初期救急の第4週目は引き続き、市立病院に担当していただくことになっている小児科の医師の動向は、池本医師が3月末、永井医師が7月末に退職される。札幌医大の小児科医局から後任は出しにくいと言われている。その後、採用される先生が1名決まったが、小児の初期救急体制がどの程度とれるか現在不透明の状況である。昨年9月末でこどもクリニックが閉院したこともあり、滝川市民にとって厳しい状況である。今現在、どう動けばよいかは分からないが、現状の情報共有として 情報提供させてもらった。

北海道の小児救急電話相談（資料参考）は、困った時に電話をして相談する事ができる。我々からも周知できたらと思っている。実績を見ると、年間1万件くらいの電話がある。乳幼児健診や母子手帳交付時に周知しても良いかもしれない。

委員)

小児科の医師体制は、札幌医大だけではなく他の大学の医局にも派遣について、打診をしたいと思っている。まだはっきりしたことは言えないが恐らく、休日夜間急病センターのバックアップは滝川市立病院では難しいと思うので、砂川市立病院にバックアップをお願いすることになるのと考えている。

平日の救急対応についても、常勤医師が一人のため対応は厳しいと感じている。これから砂川市立病院と対応について調整していくが、今後、急患は、砂川市立病院を受診することになると思っている。

若手の30代40代の医師が来てくれれば、残る平木医師と新しく来る医師がバックアップし対応するという事もできるが、常勤医師が一人になると、救急対応や入院対応も厳しくなる。病院としては、どうか医師を確保したいが、なかなか現状は厳しいと感じている。

委員長)

入院施設として小児科は存続するのか。

委員)

医師の意向も確認するが、4月勤務に向け、病院内の見学と診療体制について相談する予定である。

委員)

以前、テレホンセンターは録音テープを使用していたが、外科の患者が内科に来たこともあった。

- 委員) 平成 29 年 4 月からの 9 か月間で消防署に 258 件の問い合わせがあり、救急出動が 12 件あったが、問い合わせ件数は問題ないと思っている。急病患者さんは、119 番通報することで位置情報もわかり場所の特定がしやすい。小児救急は、電話相談も札幌市では多くの対象者がいるが中空知での電話相談の事業化は難しいと感じている。
- 事務局) 北海道小児救急電話相談は、北海道の事業なので道内どこの市町村に住んでいても対応が可能である。
- 委員) 第 4 週を担当する市立病院医師は内科医師だけなのか。
- 委員) 内科医も外科医も担当している。当番医師が決まるのが遅い場合もあるが色々な診療科の医師が当番に入っている。
- 委員長) 何か質問・意見等はあるか。
- 委員) 滝川とか砂川で救急医療を行っているが、赤平市や芦別市からも患者さんは受診しているのか。
- 委員) 他地域からも来ている。(消防署の資料参考)
- 委員) 芦別市は医師不足で大変だと聞いている。
- 委員長) 救急医療について課題はあるが、色々な形でクリアしていきたい。今後も協力をお願いする。
- (3) その他
- 委員長) 消防署資料の説明をお願いします。
- 委員) 資料 1：滝川消防の出動件数は 1415 件(平成 28 年)、1464 件(平成 29 年)で微増である。人口は減ってはいるが住民の高齢化の影響か出動件数が増えている。江竜支署の 242 件 江部乙地区が 140 件くらいである。雨竜町は 100 件、滝川市で 140 件は出動している。
- 委員) 雨竜町民も滝川市内の医療機関に搬送されるのか。
- 委員) 広域圏内なので滝川市に搬送される場合もある。
- 委員) 救急搬送は交通事故も多いが、一番は病気搬送が多いのか。
- 委員) 搬送者は多種多様であるが、最近は交通事故が多い。また、国道 12 号線で交通事故が発生した場合、消防車も出動し安全確保している。
- 委員長) 救急搬送で何か問題点はあるか。
- 委員) 滝川市立病院で受け入れが難しい多発性外傷などは、砂川市立病院に搬送し、受け入れてもらっており特に問題となるようなことはないと思っている。
- 委員長) 滝川脳神経外科病院での救急搬送に関して何か意見はないか。
- 委員) 発熱による意識障害が疑われる患者さんが救急搬送されることがある。搬送先の第一選択として、内科に搬送された方が良かったのではという事例が稀にあった。
- 委員) 脳外科に搬送され、脳疾患以外の症例はどのくらいか。
- 委員) 脳疾患以外の症例は、3 割 4 割くらいである。
- 委員長) 滝川市の救急車は何台配備されているのか。

	<p>委員) 滝川市には2台配備しているが、救急要請があれば江竜支署、新十津川支署、赤平支署から救急出動する体制が整っている。</p> <p>委員長) 高速道路での事故対応はどのようになっているのか。</p> <p>委員) 上りと下りで管轄が違うが、上り車線の管轄は深川市である。先日の事故は2か所で発生したため、滝川市が反対車線から入り対応した。</p> <p>委員長) 先日、高速道路で発生した多重事故は、多数を救急搬送したのではないか。</p> <p>委員) 6名を救急搬送した。体制が変わり、通報を一か所で集約することで、通報体制の効率が良くなったと感じている。また、通報を受けた段階で通報場所が分かるシステムを導入したことで、出動場所の間違いは起きていない。</p> <p>委員長) その他、質問意見が無ければ閉会とする。</p>
<p>会議資料</p>	<p>資料 平成29年度 滝川市休日夜間初期救急医療維持・確保対策検討会議議案</p>